

カント倫理学と徳の理念の問題 (資料)

はじめに

○カントと徳の理念の問題

カントにおける徳の理念の問題。徳の理念は『純粹理性批判』で真っ先に名指される理念であるが、その重要性は見過ごされがち。

●引用① 『純粹理性批判』における徳の理念

プラトンはその理念を、とりわけすべての実践的なもの、つまり自由に基づくもののうちに見出したが、この自由もまた、理性の固有の産物である認識のもとにある。徳の諸概念を経験から汲み出そうとする者、および、せいぜい実例として不完全な解明にしか役立ちえないものを、模範として認識源泉たらしめようとする者(実際に多くの者がやってきたことだが)は、徳を、時間と状況に応じて変わる、いかなる規則としても使えないあいまいで不可解なものにしてしまうであろう。これに対してあらゆる人が気づいているのは、その人に誰かが徳の模範として表象されたときには、その人はそれでもつねに真の原型をたんに自分自身の頭のなかに持っていて、この原型とあのいわゆる模範を比較し、そうしてたんにこの原型に従って模範を評価するということである。この原型がところで徳の理念 (*Idee der Tugend*) であって、この徳の理念に関しては、あらゆる可能的な経験の対象はたしかに実例として(理性の概念が要求するものが、ある程度までなされうるといふ実例)としては役立つが、とはいえ原型としては役立たない。人間が、徳の純粋な理念 (*die reine Idee der Tugend*) が含むものに完全に適合して行動することは決してないであろうことは、この思想のうちには何かキマイラ的なものがあることを証明するものではない。というのも以上の事情にも関わらず、道徳的な価値と非価値についてのすべての判断は、この理念を介してのみ可能であるからである。(A314-5/B371-2)

○本提題の課題

本提題では、徳とその理念をめぐるカントの基本的ないくつかの確信(一)と、『宗教論』や『倫理の形而上学』での徳の定義を確認したうえで(二)、カントの徳理論を、古代以来の徳をめぐる重要問題「徳は教えられうるか」と交差させる(三)。

一 徳をめぐるいくつかの確信

○理念としての徳

徳が理念であることは、七〇年代の講義録でも断言されている(XXVII 76)。さらにこうした理念としての徳という発想を準備したのは、六〇年代の「イデアール」としての最高善の考察。

●引用② 最高善のイデアール

ディオゲネスの最高善のイデアールは否定的なもの、すなわち、苦痛と悪徳がないことで、最小の手段である。エピクロスは徳に関して否定的であり、ゼノンの最高善は幸福に関して否定的である。(XIX 94, Refl. 6583)

最高善。最小の欲望と単純さにおける最大の幸福（最小の徳）

エピクロス：最大の欲望とその満足における最大の幸福。

ゼノン：徳のみによる最大の幸福。

プラトンの道徳哲学は神秘的である。

(中略)

エピクロスの体系は快樂のイデアールであり、ストア派の体系は徳のイデアール (ein Ideal der Tugend) であり、キュニコス派の体系は単純さのイデアールである。

(XIX 95, Refl. 6584)

○純粋な徳の表象の力

徳の理念の意義は、統制的理念としてのそれにつきない。『実践理性批判』「方法論」でカントは、「ひとを動かす力」を備えるという「徳の純粋な表象」を、道徳教育において適切に使用するべきことを説くが、こうした発想も前批判期に遡るカントの確信。

●引用③ 善行への手段としての「純粋な徳の表象」

エピクロスは私たちを行為へと動かす実行の主観的な根拠を、判定の客観的な根拠より優位に置いた。ゼノンは逆である。(中略)

奇妙なことであるが、利益や名誉を表象してみても、徳をまねぶ強い決心をもたらすことに関しては、徳の純粋な像それ自体そのもの (das reine Bild der Tugend an sich selbst) にはかなわない。そして、ひそかに名誉が得られる見込みによって駆り立てられているときでさえ、ひとがそのことをなすのはその名誉のゆえのみではない。そうではなく、徳の原則がそれをもたらしたのだと、ひそかに納得して思い込むことができるかぎり、それをなすのである。私たちは私たち自身の眼から、私たちの我欲的な誘因のメカニズムを隠さねばならない。

人間を道徳的な善へと駆り立てる、もっとも強力な手段は、それゆえに、純粋な徳の表象 (die Vorstellung der reinen Tugend) である。(XIX 112-3, Refl. 6619)

○徳と幸福

徳の純粋な表象 (理念) はひとを善へと駆り立てる力を備えるが、『実践理性批判』「弁証論」でのストア派批判にも関わらず、徳はひとを幸福にする力も持つとカントは確信していたように思われる。晩年の『倫理の形而上学』で表明される徳の自足性の思想 (VI 405) は、すでに30歳ごろの若きカントの「覚書」のうちに。

●引用④ 「徳だけが真の幸せをなす」

徳の真の報酬はたましいの内的な静けさであり、その他の善はこの静けさを破壊するかだめにするかである。学識も、死後の名声も、富も、これらすべては真の善をそなえていない。だから徳だけが真の幸せをなすのであり (Also macht die Tugend nur das wahre Glück)、徳は、充足のうちにも、欠乏のうちにも、すすり泣きのなかにも、悦びのなかにも、満足させる何ものかを見出す。 (XVII 230, Refl. 3703)

※ 徳はひとつの理念であり、ひとを善へと駆りたて、ひとを幸せにする力を持つというのが、カントの基本的な徳をめぐる確信。これを踏まえ、カントの徳理論へ。

二 強さとしての徳

○徳のカント的定義

カントの徳の定義のコアは、意志の「善さ」と「強さ」。それも人間的なものであるかぎりの「強さ」こそが、カントの徳の定義の核心をなす。

●引用⑤ 人間の強さとしての徳

徳は意志の道徳的な強さを意味する。ただこれではこの概念の意味をつくしていない。というのもそうした強さは、神聖な(超人間的な)存在者にも帰属しうるからである。こうした存在者においては、いかなる妨げとなる衝動も、その存在者の意志の法則に対立することがなく、それゆえにすべては法則にしたがって進んで行われるのである。徳とはしたがって、自分の義務に従うさいの、人間の意志の道徳的な強さである。 (VI 405)

○徳と神聖性

以上の定義にも見られる徳と神聖性の対比も、カントの徳をめぐる思考に一貫している。

●引用⑥ 徳と神聖性

倫理学を徳論によって説明することは、徳がたんに内的な裁判所に属するかぎりでは、適切である。とはいえ徳はたんに道徳的に善い行為を示すのではなく、同時に、敵対者の大きな可能性と、またそれゆえに内的な戦いを含むから、徳はあまりに狭い概念である。というのも私たちは、倫理学を天使や神に割り当てることはできるが、徳を(本来的には)割り当てることはできないからである。天使と神には神聖性はあっても徳はないからである。 (XXVII 13)

※ 徳はひとつの理念であり、その徳とは人間存在の倫理的な強さのことである。こうした強さをいかにして獲得しうるかを問うことで、カントの徳をめぐる思考は、「徳は教えられうるか」という、ソクラテス・プラトンの時代以来の古い問いと交差する。

三 徳は教えられうるか

○カントの回答とその背景

「徳は教えられうる」と答えるのが、カントの最終的な回答 (VI 477)。だがそれ以前の遺稿には、正反対の断言や (XIX 174, Refl. 6828)、「徳は学ばれうる」という回答の根拠が異なる考察などが見られる。模索は『倫理の形而上学』刊行直前まで続く。

●引用⑦ 徳は学ばれうるか

「徳は学ばれうるか？」は、二つの意味で受け取られうる。1. すべての道德感情なしに、つまり意志が実践的な理性の規則によって規定されうることなしに、誰かが徳とは何かを理解できるだろうか？ 答え：否。第二に、徳を構成する熟練 (*fertigkeit*) は、指令や模倣によって獲得されうるだろうか？ 獲得されうる、繰り返しの訓練によって。とはいえたんに指令に従うのではなく、自分の衝動に従ってのことである。 (XIX 266-7, Refl. 7185)

○形而上学によって「徳は教えられうる」のか

上の「覚書」のような、「訓練」により獲得される「熟練」と徳を捉えることを、『倫理の形而上学』のカントは退ける。それではひとつの形而上学である徳論を通じて、強さである徳が「教えられうる」のか？『倫理の形而上学』本文にも「準備草稿」にも躊躇が見られる。

●引用⑧ 「徳論の形而上学的基礎」という課題への疑義

すでにこの本の名称である「徳論の形而上学的基礎」が、取りすました明敏さによるペダンティックな気取りにも見える。これではあたかも、「徳とは何か」「何によってひとは徳に達するか」「徳はどのような高貴な実りをもたらすのか」を、それを一瞥するだけでも怖気づく、形而上学という深淵に入り込もうとしなければ、キケロのように根本的に知ることができないかのようである。 (XXVIII 374)

○「あいまいに考えられた形而上学」へ

こうした疑念に、問題となっている倫理と徳論の形而上学の原理を、常識のうちにも内在した、「あいまいに考えられた形而上学」と位置づけることで、カントは応答する。

●引用⑨ 徳の形而上学の「ひとを動かす力」

道德の原理は実際には、よくそう思われているように、何らかの感情に基づいているのではなく、実際には、それぞれの人間において、その理性素質のうちに内在している、あいまいに考えられた形而上学に他ならない。義務の命法について、また自分の行動の道徳的な判定へその命法を適用することについて、自分の生徒とソクラテス的に問答することをこころみる教師なら、このことに容易に気がつく。——義務の命法の述べ方 (技術) は形而上学的である必要はないし、言葉はスコラ的である必要はない……それでも思想は形而上学の基礎要素にまで遡らなくてはならない。この要素がなければ、徳論には確実さや純粋さばかりでなく、ひとを動かす力 (*bewegende Kraft*) さえ期待できないからである。 (VI 376)